心臟病	二・〇九	二・〇〇	一・七五
肺炎	〇・九五	〇・九五	〇・八二
老衰	〇・七六	〇・六六	〇・六一

(1) 一九四〇及一九三九兩年分はザールブリュッケンを除く六十二市

(2) 外來人口を除く (3) 戰死を除く

一九四〇年北米合衆國國勢調査結果の速報

一七九〇年以降十年毎に國勢調査を施行して來た北米合衆國の第十六回の國勢調査は昨一九四〇年四月一日現在を以て施行せられたが、その速報的結果として獨逸統計局機關誌 Wirtschaft u. Statistik Nr.20 u. 22 の報告する所を掲ぐれば次の如くである。

總人口は植民地を除き一億三千百四十萬で、支那(四億二千七百萬)、ソ聯(歐洲部分のみで一億五千萬)に亞ぎ世界第三位を占めることになる。

いま同國特有の人口著增の跡をみると建國以來の過去百五十年間に三十三倍となつた勘定になり、過去百年間に七倍半、一八七〇年以降に三倍、過去五十年間に倍化したことになる。但し國勢調査年次間の增勢は更に緩漫化の跡著しく、前調査以降の增加總數八百七十萬、七・〇%の數字は前調査年次間の增加に較べて其の半數にも達せず、同國建國以來の最低數字となつてゐる。十八世紀末以降の同國國勢調査年次間の人口增加の跡を表示すれば次の如くである。

年次	總人口	增加率(百分比)	人口密度(一方粁に付)
一九七〇	三、九二九千	——	一・七
一八〇〇	五、三〇八	三五・一	二・三
一八一〇	七、二四〇	三六・四	一・六
一八二〇	九、六三八	三三・一	二・一
一八三〇	一二、八六六	三三・五	二・八
一八四〇	一七、〇六九	三二・七	三・七
一八五〇	二三、一九二	三五・九	三・〇
一八六〇	三一、四四三	三五・六	四・〇
一八七〇	三八、五五八	二二・六	四・九
一八八〇	五〇、一五六	三〇・一	六・四
一八九〇	六二、九四八	二五・五	八・〇
一九〇〇	七五、九九五	二〇・七	九・七
一九一〇	九一、九七二	二一・〇	一一・七
一九二〇	一〇五、七一一	一四・九	一三・五
一九三〇	一二二、七七五	一五・七	一五・七
一九四〇	一三一、四一〇	七・〇	一六・八

右最近國調年次間の增加率を年平均增加率に換算すると〇・六八%で、之を諸他の主要國の數字と對照すると次の如くである。

米國	一九三〇—四〇	〇・六八%
獨逸	一九三三—三九	〇・六三%
佛蘭西	一九三一—三六	〇・〇三%
伊太利	一九三一—三六	〇・八三%
ソ聯(歐洲の部)	一九二六—三九	一・〇九%
同(アジアの部)	〃	一・六五%
日本	一九三〇—三五	一・四四%

又一方粁當りの人口密度僅かに一六・八人は世界列强中ソ聯邦と共に特殊の例外を爲すこと右表に見るが如くである。

米國		一六・八
獨逸(現領域)		一三二
同(舊領域)		一四七
伊太利		一四三
日本(內地)		一八九
ソ聯(歐洲の部)		二三
同(アジアの部)		二・七

但し世界最大の大都市は同國の占める所で、本調査によるニューヨーク市の人口は七、三八〇、二五九人、一九三〇年に對し更に約四十五萬人、六・五%の增加の跡を示してゐる。(第二位は東京市の六百五十萬、第三位は伯林市の四百三十萬、第四位はロンドン市の四百十萬。但し都市人口の一部と看做すべき近郊人口を含めると大ニューヨーク、所謂メトロポリタン地區の人口は一九三三年現在で一千百萬、第二位は大ロンドンの一九三八年現在人口八百七十萬となる。)その他の大都市の人口を示せば次の如くである。

シカゴ	三、三八四、五五六	(前國調時と殆んど變らず)
フィラデルフィア	一、九三五、〇八六	(約一萬五千減)
デトロイト	一、六一八、五四九	(約五萬增)
ロサンジェルス	一、四九六、七九二	(約廿五萬九千增)

尙、右人口增加の跡を更に精細に分析すると移入人口の著減の結果主として自然增加によつて居り、自然增加總數は約八百十萬人、人口百に付六・六の割合となつてゐる。右自然增加中の半數は黑人、アメリカ印度人及び雜種の特に多い諸地方に屬するもので、之らの諸地方の自然增加率は人口百に付一〇・七人となつてをり、最高のニューメキシコ州は一六・三人といふ

數字を見せてゐる。反之、最低は極西部の二・八人、都市の多いニューイングランド地方は三・七人となつてゐる。尙、超過移入人口五千萬は人口百に付〇・四人の割合となる。

一九三〇年以降の人口動勢中特記すべきものは都市膨脹の緩漫化せることで、一九二〇——三〇年間に八百九十萬、三二・四%を增加した人口十萬以上の大都市人口は三〇——四〇年間には僅かに百五十萬、四・二%の增加をしか示してゐず、反之、其の他の人口は右大都市人口の增加率を超えるに到つてゐる(二〇——三〇年間には大都市人口の三二・四%增に對し其の他の人口增は一〇・四%、三〇——四〇年間には前者の四・二%に對し後者は八・二%)。前世紀末以降の人口十萬以上大都市人口の增勢の跡を示せば次の如くである。

	總人口增加率(百分比)	大都市人口增加率(百分比)	大都市人口の總人口に對する百分比
一八九〇年	—	—	一五・四
一九〇〇年	二〇・七	四六・五	一八・八
一九一〇年	二一・〇	四二・九	二二・一
一九二〇年	一四・九	三五・一	二六・〇
一九三〇年	一六・一(1)	三二・四(1)	二九・六
一九四〇年	七・〇	四・二	二八・八

(1)調査施行日(一九三〇年は四月一日、一九二〇年は一月一日)の相違を無視す。

右大都市人口の人口增勢緩漫化は大都市への人口集中が緩漫化されたにも依るが、併し近郊都市が猶ほ市域化されない爲の影響も見逃せない(サンフランシスコ及クリーブランド等)。直接に人口減を示してゐるのはシカゴ以下三十市、人口增の六十二市は概して交通及娯樂の中心地か乃至は軍需工業地が多い。

人口百萬以上の世界都市　(埋め草)

(1)	大ニューヨーク市	(1)	一九三〇・七・一	一、〇〇〇千
(2)	大ロンドン市	(2)	一九四〇・四・一	七、三八〇
(3)	東京		一九三八・六・三〇	八、七〇〇
(4)	大パリー市	(3)	一九四〇・一〇・一	四、〇六三
(5)	ベルリン		一九三六・三・八	六、七七九
(6)	モスクバ		一九三九・五・一七	四、九六三
(7)	上海		一九二九・一・一七	二、八三〇
(8)	シカゴ		一九三六	四、〇三九
(9)	大阪		一九四〇・四・一	三、四八六
(10)	レニングラード		一九四〇・一〇・一	三、三八五
(11)	ベノスアイレス		一九三九・一・一七	三、一九一
(12)	ウィーン		一九三八・一・一	二、五〇二
(13)	フィラデルフィア		一九三九・五・一七	一、九三〇
(14)	リオデジャネイロ		一九四〇・四・一	一、八三五
(15)	ハンブルグ		一九三七・一・一	一、七五六
(16)	デトロイド		一九三九・五・一七	一、七一二
(17)	北京		一九四〇・四・一	一、六一九
(18)	大ブダペスト		一九三六	一、五五六
	ブダペスト市		一九四〇・一・一	一、五一八
(19)	ロサンジェルス		一九四〇・一・一	一、一一六
(20)	大カルカッタ		一九四〇・四・一	一、四九七
	カルカッタ市		一九三〇	一、四八六
			一九三七	一、二六一
(21)	メキシコ		一九四〇・三・六	一、四七七
(22)	バルセロナ		一九四〇・一・一	一、三九九
(23)	カイロ		一九三九・六・三〇	一、三二九
(24)	ローマ		一九四〇・一・一	一、三二七
(25)	ワルシャウ		一九四〇・六・一	一、三〇七
(26)	天津		一九三六	一、二九二
(27)	シドニー		一九三七・一二・三一	一、二八〇
(28)	マイランド		一九四〇・一・一	一、二三五
(29)	名古屋		一九四〇・一〇・一	一、二二八
(30)	マドリッド		一九四〇・一・一	一、一九五
(31)	サンパウロ		一九三七・一・一	一、一六八
(32)	ボンベイ		一九三〇	一、一六一
(33)	京都		一九四〇・一〇・一	一、〇九〇
(34)	グラスゴー		一九三九・六・三〇	一、一三二
(35)	廣東		一九三六	一、一二三
(36)	バーミンガム		一九三八・六・三〇	一、〇四一
(37)	メルボルン		一九三七・一二・三一	一、〇二四
(38)	南京		一九三六	一、〇一九
(39)	大モントリオル		一九三〇	一、〇〇〇
	モントリオル市		一九三〇	八九

(1)メトロポリタン地區　(2)近郊を含むロンドン　(3)セーヌ區

なほ右三十九の世界都市の人口總計は九千三百萬で、世界人口の四・三%を含んでをり、三十九市中十五市は歐洲に、十一市はアジアに、十市は米洲に、二市は濠洲に、一市はアフリカ洲に屬することになる。

(國際統計局の集計になるものを一部補正)